

## 入選

### わたしの町の駅員さん

長野県 松川中央小学校 四年  
菅沼 結衣

わたしは今年、長野県の果樹園の広がる田舎の町に引っ越してきました。それから間もなく、スイミングスクールに通い始めました。土曜日に行くときは、電車で通うことになりました。

初めて電車に乗る日、駅に行くと、これまでに乗ったことのある福岡の駅と比べて、駅の大きさ、人の数、システムがずいぶんとちがいました。自動券売機はなく、駅の切符売り場に、おじいさんの駅員さんがいました。わたしは、初めての駅に少し戸惑っていました。

すると、その駅員さんが、

「切符、買いますか。」

と声をかけてくれました。そして、安心して切符を買うことができました。すると、

カンカンカンカンカン……。

電車の来る音がして、しゃだん機が下りてしまいました。わたしは、

（電車に乗りおくれしてしまう。どうしよう……。）

と、とても焦りました。

そこへ、さっきの駅員さんが来て、先に歩いてゆうどうしてくれました。

「そこを、くぐって行っていいですよ。」

と、下りてしまったしゃだん機の下から、わたしをくぐらせてくれました。

「ありがとうございます。」

と、わたしは言いました。駅員さんは、少しわらってくれました。そして、わたしがくぐっている間に、運転手さんに手で合図を送り、電車を止めていてくれました。

わたしは、駅員さんのおかげで乗りおくれしてしまうはずだった電車に、無事乗ることができました。わたしは、この駅のできごとで、自分はできなかったこと、駅員さんにやってもらったことが、4つもあるのだなど、あらためて感謝の気持ち、思いやりを感じました。

都会では、わたしのようなたった一人のりおくれた乗客のために、電車を止めるようなことはできないけれど、田舎だからこそ電車を止めてくれることができのではないかな、と思いました。

この町には、駅員さんのような、当たり前の親切と「その地域だからこそできる親切」を持っている人がたくさんいます。